

#### 一 目次 一

「旧レリーフ」から「新レリーフ」へ ―	●第I回
「新レリーフ」製作検討1 ――――	━■第Ⅲ回
「新レリーフ」製作検討2	─□ 第Ⅲ回
本体製作 1	─□第IV回
本体製作 2	─□第V回
取付工事	─□ 第VI回
完成 ————————————————————————————————————	—□ 第VII回

#### 【中之島フェスティバルタワー 建物工事概要】

 事業主:朝日新聞社
 階 数:地上39階(うち塔屋2階)、

 設計:日建設計
 地下3階

設 計:日建設計 地下3 ド 施 工:竹中工務店 高 さ:200m

工 期: 2010(H22).1月~2012(H24)秋 建物用途: 事務所・ホール・店舗等 所在地: 大阪市北区中之島 2-22 (地番) 延べ面積:約14万6,000 ㎡

## 第Ⅱ回

## 「新レリーフ」製作検討1



#### 本製作のための様々な準備・検証

## 解体されたレリーフを前に

現代の感性をもって、「牧神、音楽を楽しむの図」を新しいレリーフとして再製作する。それは 何をもとに具現化していけばよいのでしょうか。

レリーフの製作監修は、旧レリーフ制作時のリーダーであった建畠覚造氏の長男である彫刻家・ 建畠朔弥先生とその仲間の鷹尾俊一先生のお二人にお願いすることが決まっていました。しかし、 監修の先生方も私たちも、これほど大きなレリーフを製作することは、初めての経験です。どこから 手をつけてよいものか、私たちは悩みました。

「モノを前にして、顔合わせをしましょう。それから考えましょう。」

施主の言葉により、運び込まれた旧レリーフを前にして3者(施主、監修者、当社)が初顔合わせをし、意見交換を行うことになりました。その中で、旧レリーフの制作の元となった実物の1/10模型(=マケット。以下、マケット)も現存することがわかり、工場に運び込まれました。



■ 旧レリーフ搬入

当社信楽工場の製作スペース。奥に旧レリーフ6体、手前に 新レリーフ6体を敷き並べるヤードを確保し、高所から見比べ ながらの製作が可能となった。



■ 1/10 旧マケット確認

旧マケットは、神戸朝日ホールホワイエ壁面に今も設置されている。 写真左から、建畠晢氏(当時:国立国際美術館館長)、監修者の 建畠朔弥先生、鷹尾俊一先生(ともに日本大学芸術学部で教鞭)、 弊社工場長の的場

お互いの自己紹介が緊張の中で行われた後、すぐに旧レリーフの保管場所へ。圧倒的な迫力を たたえた実物を前にすると、監修の先生方の気持ちがみるみる高揚してくる様子がわかりました。 「この荒々しい表面テクスチュアはどんな道具を使ったんだろう。」、「この稜線は非常に彫刻的だ。」、 「この笛の目地はどう見てもおかしい。」、「取付のときに最後の調整で合わせたんだね。」、「けれど、 かなり計算立てて作られている。よくできているよ。」

などという言葉が次々と出てきました。





■ 旧レリーフ検証

左から、建畠晢氏(当時:国立国際美術館 館長)、監修者の建畠朔弥先生、鷹尾俊一先生 (ともに日本大学芸術学部で教鞭)、弊社工場 長の的場



■ 旧レリーフ 「牧神(笛)」部分 表面のテクスチュアに汚れがたまり、荒々しさが際だつ。



■ 旧レリーフ 「牧神(鳥)」部分

# ₩一年にも及ぶ検証・準備

一方、私たちはメーカーとして製作するにあたり、「新レリーフの形状の基本となるもの」「大きさ (全体、1 ピースの大きさ)」「製作手法」「色目(釉薬表現)「表面テクスチュア」「目地割」など、 検討すべき項目を列挙し、それぞれの項目ついて手法の検討、試作を含め、段階的に進めていく ことになりました。特に今回のような大きなプロジェクトにおいて、こうした準備期間を設け、 ひとつひとつ解決することが大切だと、私たちは考えたのです。



旧レリーフ実物を前にそうした説明を行ったところ、施主も監修の先生方もすぐに理解を示して 頂きました。きっと大変な作業になるだろうということを予測されたのでしょう。こうして一年 にもおよぶ本製作へ向けての準備・検証が行われることになったのです。





■ 旧レリーフ洗浄 旧レリーフの表面を洗浄。水、酸洗いを行うことにより、当時の鮮やかな濃紺色が甦った。





■ 旧レリーフ測量 ■ 旧マケット測量 旧レリーフ、旧マケットとも、各ピース、各箇所ごとに、縦・横・高さの測量を行う。 計測した数値をデータ化し、図面へ反映させ検討した。

### ■基本形状と大きさの決定

旧レリーフと旧マケットの検証の結果、外観形状と大きさは旧レリーフを基本とすることになり ました。旧マケットはあくまでも習作であり、旧レリーフが作品であるとの考えからです。但し、 厚み(高さ)については、旧マケットを基準とすることにしました。なぜなら旧レリーフは、壁面に

設置された後に、周囲のタイルが貼られたため、旧マケットで想定した厚みが生かされていなかった のです。また今回製作するレリーフは、旧レリーフよりも高い場所に設置されるということからも、 厚みを出し、より存在感のあるものに仕上げていくことになりました。



■ ハイワーク(高所作業車)による撮影風景 レリーフ各体につき、直上から撮影を行う。牧神3体については、一度で収まりきらない ため、分割した写真を合成し全体のフォルムを捉えた。



■ 直上から撮影された旧レリーフ「牧神(鳥)」 3カット撮影し、合成したもの。

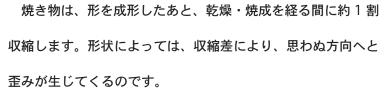


■ 旧レリーフと旧マケットの比較図 旧レリーフと旧マケットの形状を図面化。比較を行うと その違いがよくわかる。



## ♥マケット製作と目地割検討

これほど巨大なレリーフを作り上げ、なおかつ壁面に設置するとなると、マケットを基に単純に10倍にしたものを作ればよいというわけではありません。旧マケットと旧レリーフは形状や各パーツの高さなどが微妙に異なっており、マケットから目指す大きさに拡大して作ることがいかに難しい作業だったかを物語っていました。



またレリーフには、マケットにはない目地が入ります。焼き物は、焼成できる1ピースの大きさに限界があるため、例えば牧神のレリーフー体を製作するには、大体80~90ピース程度に分割する必要があります。ピースに分けることによって出てくる継ぎ目を目地と呼び、大きなレリーフになればなるほど、そのピース数は増え、目地も増えるということになります。監修者からは、「レリーフに入る目地は、それ自体が意匠であり重要である」、との意見もでました。目地をどのように割っていくかは、レリーフ全体の印象に影響を与えるのです。

当初は旧レリーフが制作された時と同様に、1/10のマケットを製作し形状を確認する予定でしたが、今回は 1/10 を製作した後、さらに 1/5 のマケットを製作し、目地割と製作手法の検討を行うことになりました。(※図1)



■ 1/10 新マケットの製作



■ 1/5 新マケットの製作

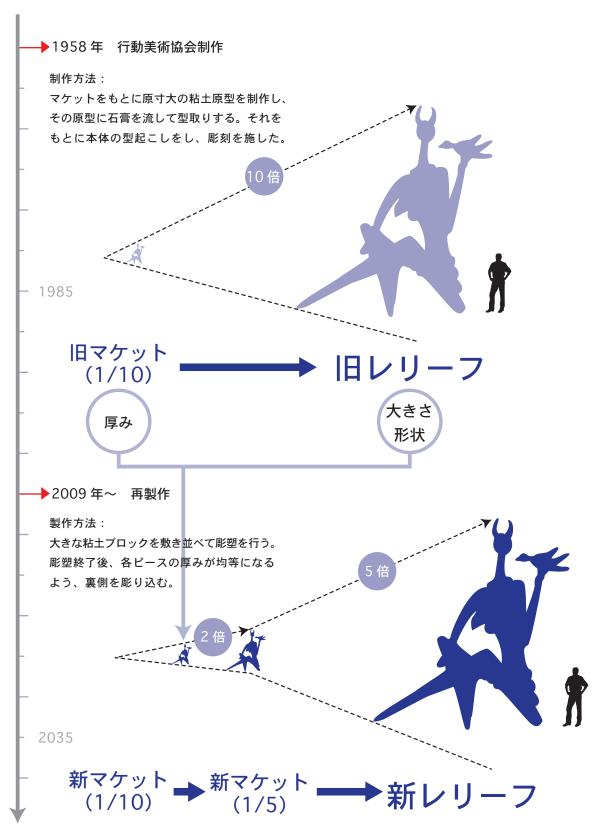


■ 1/5 新マケットの製作(建畠先生)



■ 1/5 新マケットの製作 (鷹尾先生) 先の調査で作成した図面と高さのデータを元に マケットを製作する。 先生方にマケットの監修と 最後の仕上げを行っていただく。





(※図1) 旧レリーフ/新レリーフ:製作方法の比較